

## 付録 古代の柏葉

Ⅱ章でも少し述べたように、古代には広葉樹の葉を食器に用いる習慣があった。例えば『隋書』倭国伝には「俗、盤俎なく、籍くに槲の葉を以てし、食するに手をもってこれを喰らう」とある。ここでの「盤俎」とは皿や俎のこと、「槲の葉」とはカシワの葉を指している。『隋書』が倭國の風俗を正確に伝えているならば、聖徳太子の時代にも葉器で手食という習慣がなお根強かったことになる。

この頃、倭人はすでに仏法を敬い、また文字を知るところだ。しかしながら、こと食にかんしてはこのありさまである。そしてこの習慣は、藤白坂へと引かれてゆく有間皇子が製した「家にあれば筈に盛る飯を草枕旅にしあれば椎の葉に盛る」という、あの有名な死出の歌（万葉集第142番歌）にも垣間見える。ここでは「椎の葉」とあるが、それは本当にシイの葉だったのだろうか。ともあれ、木葉を食器に用いる伝統は弥生時代から長く続いたようであるが、皇子が「筈に盛る飯を・・・」と詠んだように、飛鳥時代半ばには歴とした食器を用いる食事が定着していたのである。

『原色日本植物図鑑（木本編Ⅰ・Ⅱ）』（木村四郎・村田 源 1971・同 1979、以下『図鑑』）には、古来食物を包むのにその葉を用いたとする樹木がいくつか見える。その第一はカシワ（*Quercus Dentata*）である。カシワはブナ目ブナ科コナラ属コナラ亜属。その葉は「・・・葉身は倒卵状長楕円形、鈍頭、基部はくさび形に狭くなり、やや耳状となり、きわめて短い葉柄をつける。」とあり（Fig.39）、現在でも柏餅を包むのに用いられる。いわゆる槲葉といえば、普通はこのカシワの葉を指すとみえる。

ところが、文化的な意味での槲葉はカシワの葉だけではない。そもそもカシワは、関東以西の里山にはほとんど自生しておらず、西日本ではその入手が困難である。そこで『延喜式』などに見える槲葉は、植物分類上のコナラにあたるとする説<sup>1)</sup>がある。『図鑑』によると、コナラの葉は「・・・倒卵状長楕円形、鋭尖頭または鋸頭、基部はくさび形、ふちは鋸歯縁」で長さ7.5-14cm。これはカシワの葉よりやや小さいようで、近くに自生しているコナラでこれを超える大きさの葉は見かけなかった。

いっぽう、コナラ属のナラガシワ（*Quercus aliena*）の葉は、『図鑑』によると「・・・倒卵状長楕円形、急に鋭頭、基部は広いくさび形、鈍または鋸歯縁、長さ12-30cm、はじめ両面有毛、後に表面深緑色、無毛、裏面星状毛を密布して灰白色、やや革質、葉脈は12-14対。葉柄は長さ1-3cm」とあり、縁辺の鋸歯がやや鋭い点と、

葉柄がやや長い点を除けばカシワによく似ている（Fig.39）。筆者が採取した例は最大で23.5cmで、これは柏餅のカシワよりもかなり大きい。なお西日本では、ナラガシワの葉で柏餅を包んだ例がいくつかある<sup>2)</sup>。

ホオノキ（*Magnolia obovata* Thunb.）の葉も、古来食物を包むのに用いられた。『図鑑』によれば、その葉は「倒卵状長楕円形ではなはだ大きく、長さ20-40cm、幅13-25cm、全縁でやや鈍頭、下面は粉白色をおび、若い時は細軟毛があり脈上には長い絹毛を散生する。側脈は17-24対、下面に凸出する」という（Fig.40）。

朴葉は宝亀2年5月の「奉写一切經所告朔解」（大日古6-177）に「保々柏（ホオガシワ）」として見える。また万葉集にも、「保宝葉」（ホホガシワ）を見て詠んだ2首があり（第4204・4205番歌）、そのうちの1首は「皇祖の遠御代御代はい敷き折り酒飲むといふそこのほほがしは」と、遠い御代にはホオガシワ（保宝我之波）の葉を折って酒を飲んだ、という歌である。

このように、ホオノキの葉も食器として用いたことは確かだが、正倉院文書に見えるのはほとんどが単なる「柏」である。それがコナラやナラガシワなのかはわからないが、いずれにしても、東大寺写経所で日常用いられた食器は土器であって、木葉を食器に用いる機会は限られていた。しかし上山寺悔過所および吉祥悔過所（天平宝字8年3月～4月、本書Ⅱ章12節参照）では、食器とみえる柏葉を相次いで購入している（Tab.17）。また、天平勝宝6年（754）の白馬の節会で詠まれた一首「印南野の赤ら柏は時あれど君を我が思ふ時はさねなし」（万葉集第4301番歌）は、あるいは秋冬に色変わりしたカシワ類の葉とも解せるが、それを確かめる術はない。ともあれ、柏葉を食器に用いる習慣は、なおも続いていたのである。

このほか、食器の代わりに用いられた可能性がある植物にアカメガシワ（*Mallotus japonicus*）がある。この植物はトウダイグサ科アカメガシワ属で、山野に普通にある落葉高木である。野梧桐とも。その新芽が赤いため「赤芽柏」という。『図鑑』によると、その葉は「・・・長柄があり、葉柄は紅褐色、長さ5-20cm。葉身は長さ10-20cm、卵円形、鋭尖頭、基部は丸いか切形、全縁、または波状縁、浅く3裂することがある。表面深緑色、基部に近く2腺点あり、裏面は淡緑色、小腺点を密布し、両面に星状毛を散生する。葉脈は基部の3脈が太い。」（以上、『図鑑』より）とあり、カシワとはいいつつも、コナラ属の木葉とはずいぶん異なる（Fig.41）。ごく身近な植物ではあるが、古代にも柏として用いられたかはわからない。

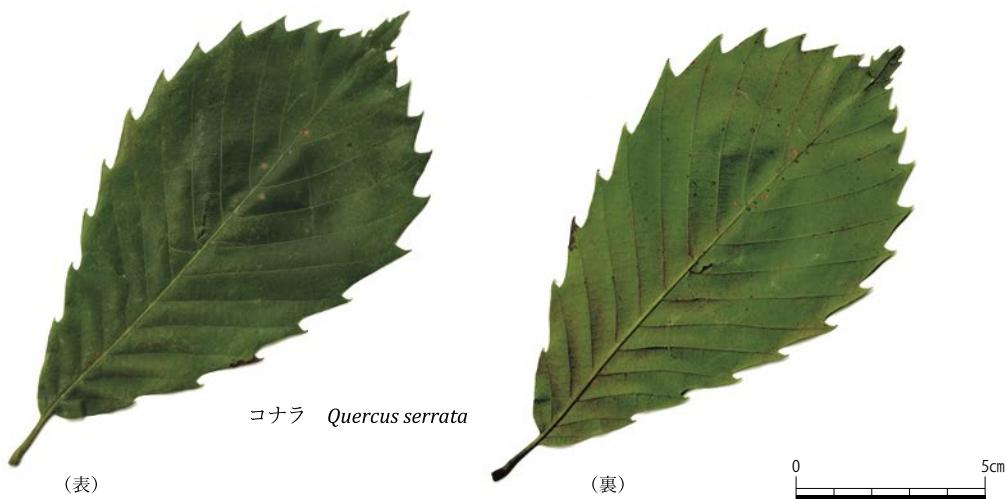
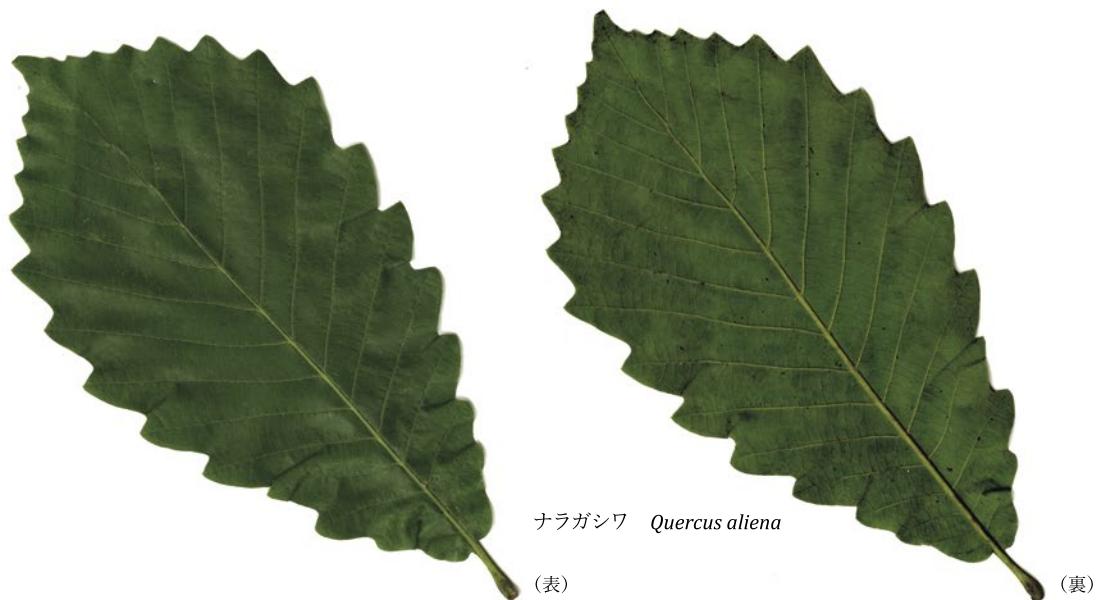
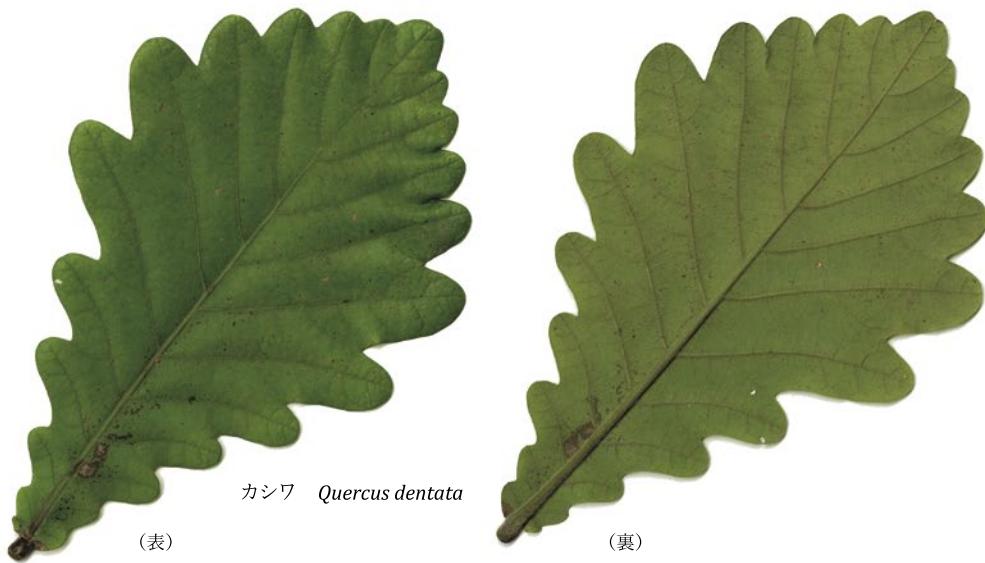


Fig. 39 コナラ属の木葉



ホオノキ *Magnolia obovata* Thunb.

Fig. 40 ホオノキの木葉

Tab. 17 正倉院文書所載の柏一覧

名称	数量	値	大日古		史料名	年月日	備考
			巻号	頁			
柏	8 把	8 文	4	433	「隨求壇所解」	天平宝字4年	10月 16日
柏	8 把	8 文	4	438	「隨求壇所解」	天平宝字4年	10月 16日
柏	40 把	35 文	5	319	「二部般若錢用帳」	天平宝字6年	閏12月 20日
柏	20 把	20 文	5	325	「二部般若錢用帳」	天平宝字6年	閏12月 27日
柏	40 把	35 文	5	331	「造石山院所解」	天平宝字6年	閏12月 6日
柏	20 把	20 文	5	372	「造石山院所錢用帳」	天平宝字6年?	月欠 日欠
柏	5 把	2 文	13	272	「写千巻經所錢并衣紙下充帳」	天平宝字2年	8月 8日
柏	5 把		13	286	「写千巻經所錢食物用帳」	天平宝字2年	6月 27日
柏	20 把		13	340	「東大寺写經所食口帳」	天平宝字2年	6月 30日
柏	2 把	2 文	13	348	「東大寺写經所食口帳」	天平宝字2年	8月 30日
柏	1 俵		14	437	「後一切経料雜物納帳」	天平宝字4年	12月 28日
柏	4 表		15	376	「供養料雜物進上啓(?)」	(年月日欠)	
柏	40 把	35 文	16	95	「奉写二部大般若經錢用帳」	天平宝字6年	閏12月 6日
柏	20 把	20 文	16	100	「奉写二部大般若經錢用帳」	天平宝字6年	閏12月 27日
柏	40 把		16	122	「奉写二部大般若經料雜物収納帳」	天平宝字6年	閏12月 6日
柏	20 把		16	127	「奉写二部大般若經料雜物収納帳」	天平宝字6年	閏12月 27日
柏	10 把	12 文	16	131	「写經料雜物直注文」	(年月日欠)	
柏	40 把	35 文	16	133	「造石山院所解」	天平宝字6年	閏12月 6日
柏	40 把	35 文	16	136	「造石山院所錢用注文」	(年月日なし)	
柏	10 把	13 文	16	478	「上山寺悔過所錢用帳」	天平宝字8年	3月 2日
柏	10 把	12 文	16	480	「上山寺悔過所錢用帳」	天平宝字8年	3月 7日
柏	10 把	12 文	16	481	「上山寺悔過所錢用帳」	天平宝字8年	3月 10日
柏	10 把	13 文	16	487	「吉祥悔過所錢用帳」	天平宝字8年	3月 17日
柏	10 把	12 文	16	488	「吉祥悔過所錢用帳」	天平宝字8年	3月 22日
柏	10 把	12 文	16	489	「吉祥悔過所錢用帳」	天平宝字8年	3月 24日
柏	10 把	12 文	16	490	「吉祥悔過所錢用帳」	天平宝字8年	3月 27日
柏	300 把	360 文	16	496	「吉祥悔過所請雜物解案帳」	天平宝字8年	3月 17日
柏	28 把	280 文	17	267	「奉写一切経料錢用帳」	宝龜元年	12月 29日
保々柏	10 把	10 文	6	177	「奉写一切経所告朔解」		5月 29日
保々柏	10 把	10 文	17	303	「奉写一切経所錢用帳」		5月 4日

アカメガシワ *Mallotus japonicus*

Fig. 41 アカメガシワの木葉

## 補 註

- 1) 細見末雄『古典の植物を探る』八坂書房、1992年。  
 2) 服部 保・南山典子・澤田佳宏・黒田有寿茂「かしわもち」  
 1-11頁、兵庫県立人と自然の博物館、2007年。